

---

# ショボンとブーンの日米空軍物語

白米

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シヨボンとブーンの日米空軍物語

### 【Nコード】

N6067W

### 【作者名】

白米

### 【あらすじ】

この物語は架空です。

シヨボン（しよぼーん）とブーンが日米連合軍に加わり活躍する物語です。

時は朝鮮戦争停戦後。急に北朝鮮、韓国、ソ連、中国が赤軍連合を設立し世界を脅かす存在となった。

これを聞いたGHQのマッカーサーは日本軍解体を中断し日米連合軍を設立し赤軍連合の共産主義の波を抑えることになった。

## 登場人物

(´・・・´) ショボンまたはしょぼーん

元海軍航空隊隊長。

戦闘機しか乗らない。

( ^ ^ ) ブーン

ショボンと一緒に戦う、ブーン。一応友人といったほうが早い

## プロローグ（前書き）

シヨボン（しょぼーん）とブーンがプロペラ戦闘機に乗り、日米連合軍に加わり、韓国、北朝鮮、中国、ソ連軍が結成した赤軍連合を阻止する物語です。

## ブローグ

時は朝鮮戦争終結

韓国、北朝鮮が停戦を結び戦争は中断された。

その翌日、韓国、中国、ソ連、北朝鮮は軍事同盟とし赤軍連合を結成し大規模な同盟軍を持ち日本に宣戦布告を下した。

GHQのマッカーサーは、日本軍解体を一旦中断し赤軍による侵略を阻止するため日米連合軍を結成し、赤軍連合に対する行為を全力阻止を目標にした。

「ねえ、ブーン」

白いTシャツに日本陸軍のズボンを身に着けた、シヨボンが暇そうに横たわっていたブーンに話しかける。

「おっおっ」

「?どうしたの?ブーン」

「これはすごいお。日米連合軍を結成した、日米はアメリカは赤軍を抑えるために結成したって書いてあるお。しかも軍解体は中断だつてお!」

新聞をちゃぶ台に置き、人差し指で大きな記事に指を刺す。目を丸くしたシヨボンは新聞の記事を読み、

「コレって、僕たちも・・・」

「また戦えるんだお!日本のために!そして、お金も貰えるんだお!戦闘機も少ししか残って無いけど、GHQの特別命令で、生産が出来るようになったんだお」

嬉しそくに、語るブーン。疑問に思った、シヨボンは喜ぶブーンに語りかける

「じゃあ、志願してまた軍人として戻る?」

「それが良いお」

戦争に負けてもブーンの士気は下がらずに居たまま。

シヨボン一旦外に出てゲタを履きは志願書類を片手にGHQに向かう。

お昼の暑い中、汗だくになったシヨボンはGHQで警備している、日本人警官に、

「僕達、志願するのですが、これをマツカーサー殿にお渡しできませんでしょうか・・・」

「おおー、これで1000人目だな」

「へっ？」

「戦争に負けても、日本人の士気は何故か以上に上がってるんだよな。まっ、明日ここに来い」

「あ、わかりました」

## プロローグ2（前書き）

ーからやり直します。

## プロローグ2

青空と太陽が光る、東京の焼け野原ではシヨボンは汗をたっぴりかきながら、バラック小屋の戸を開き風通しの良い6畳の畳へ座り込む。と、そこには頭に神風と書かれた鉢巻に、茶色い飛行服。下は茶色い飛行ズボンで革製のブーツを身に着けたブーンが鏡の前に立って服装チェックをしていた。

「それ、日本空軍の奴じゃ・・・」

「おっおっ、GHQが支給してくれたんだお。コレを着ると一番落ち着くお」

「で、僕のは？」

「しょぼーんのは、ここにあるお」

指差したのは、丸いちやぶ台の上に雑に置かれた茶色い飛行服。護身用の拳銃は黒く塗装され、握る所には赤い日の丸のマークがあった。ガバメントM1911である。

「ひどいなあ」

「まあ、いいじゃないか。アメリカの拳銃を使うなんて初めてだ。ほら、そろそろ行くお」

「え？明日じゃ・・・」

「それが、今日になったんだお。そろそろアメちゃんの迎えが来るお。早く身に着けて」

「あ、うん」

そう言いながら、下のズボンを脱ぎちやぶ台の上にあった日本空軍の飛行服を30秒で身に付けると、

「hey! you!」

「おっおっ、来た来た」

「それじゃ行こうか」

シヨボンはガバメントのマガジンを入れ、セーフティをONにし支給された黒い革製のブーツを履きバラック小屋前で待機してい



た米軍車両に乗り込んだ

## 我奇襲に成功せり

シヨボン達は名古屋経由、そして飛行機に乗り換え、空母赤城へ到着。今現在地は対馬の軍港。さつき出たばかり。

「ん・・・？ん・・・」

うつすら、目を開けるシヨボン。そこは、ダークグリーンの色をした戦闘機に白の色に日の丸のマークが入った戦闘機に目が入った。「んあー・・・あ、ここ甲板か。何で・・・」

「おつ、起きた。整列とかどうでも良いから、零戦52型に乗るお」  
「あ、うん・・・あれ？訓練は？」

「バカダナア、俺んちは元々エースだから訓練なんていらないお」  
そういうと、零戦21型に乗り込み整備士に点検を行いシートベルトを締め、

「ほら、シヨボンも52型に乗れよ。愛機なんだろう？」

「あ、うん」

52型には黒い包みたいなのが詰められ、シヨボンはそれを見ながらコックピット内部へと移動した。

乗り込むと白い制服姿の整備士が、

「積まれているのは250ポンド爆弾です。もうすぐ発艦時間となりますので」

「燃料タンクは？」

シヨボンが言うと、

「大丈夫です。零戦52型は一部改造しましたので距離が増加しました」

「へえー」

そう言うと、前方から次々に戦闘機が爆音を上げ発艦して行く。そして隣の米軍空母も次々にF6Fが飛び立ち、水平線から顔を出す太陽に向かう。

シヨボンも発艦し、元海軍航空隊の部隊に無線を入れ当時の戦争

のように編隊を組んだ。

『この編隊は懐かしいお。』

「うん、久々だね」

会話をしながら、飛行するブーンとシヨボン。あっという間に韓国の釜山の軍港に上空を飛行。

「敵軍の軍港上空。戦闘機隊、爆撃隊は攻撃態勢に入れ」

シヨボンが指揮すると、前方の99式艦上爆撃機が急降下体制に入り、黒い筒を次々に投下していく。

黒い筒は、韓国軍の戦艦に命中すると、

ドゴオオオン！

火柱を上げ、戦艦を大破させた。

「我奇襲に成功せり！」

ブーンが言うと、戦闘も一気に急降下をし軍港のそばの飛行場に対し、赤い塗装に黄色い星のマークの塗装が塗られたMIG1に対し、7・7MM、20MM機銃を一気にぶっ放す。

機首、主翼の銃口から出る弾丸はソ連の戦闘機を次々に撃破して行く。

シヨボンの機体後方から中規模艦隊が到着。中規模艦隊の駆逐艦の主砲が炎を吹き上げ主砲を海上兵器、地上へと艦砲射撃と次々に行った。

奇襲攻撃を受けた赤軍連合所属の韓国軍は、一気にMIG1を大量に投入

「よくもやってくれたニダ！許さないニダ>、<」

周波数をキャッチしたシヨボンはこれを聞いて、

「プ・・」

笑う。

『シヨボン、MIG1が大量投入されたぞ！爆撃隊がやられないように叩き潰せ！』

「りよ、了解！爆撃隊長どの！」

シヨボンは上を見上げると、太陽が見えないくらいのMIGが大

量に出撃された。

「すごい数だ・・・」

操縦桿を下げ、零戦52型を上昇させ爆撃機護衛と入った。

## ソ連のEース

「すごい数だ・・・」

青空を埋め尽くす、M I G 1の大量投入。

『シヨボン！後ろに赤軍連合機！』

シヨボンはブーンからの無線で、後ろを振り向く。

「っ・・・！」

後方には、1機の零戦に対し10機のM I G 1が食らいついてきた。シヨボンは操縦桿を上げ、零戦を空高く、上昇した。目に刺さる、光がシヨボンの眼球に指しかかる。

シヨボンは、フラップを下げ、速度も落とし後ろに張り付いていたM I G 1をガンサイトに納めた。

急なブレーキは出来ず、M I G 1は零戦の射程距離範囲に入ってしまった。

「今だ！」

機銃の引き金を引き、機首、ダークグリーンの主翼から、7・7 M M、20 M M機銃が放たれた。シヨボンは操縦桿を細かく操作し、10機中4機を撃墜。

「戦闘機隊へ、出来る限り爆撃機に近寄らせるな！戦闘部隊はミグを出来るだけ落とすんだ！」

無線を切ると、横切ったM I G 1を追跡。

「なかなかの腕だなあ・・・ソ連軍操縦士かな？」

M I G 1は、右ロール、左ロールへとびったり張り付くシヨボンを振りぬけない。

シヨボンは、引き金に指をかけ、ガンサイトに入るのを待ち、逃げ回るM I G 1を追いかけた。

「右へ、左へと・・・」

『シヨボン、もう良い！そいつを追いかけても意味が無い！大損害を与えたからすぐに空母へ戻れ！』

「爆撃隊長、少し待ってくれ！」

『シヨボン、ぶはwwなにやってんのww軍事裁判で食らっちまうぞww』

すぐそばで見ていたブーンが、笑いをこらえずその場で笑ってしまいシヨボンのコックピット内部に響きこむ

「ブーン、少しは手伝って・・・」

『シヨボン、危ない！後ろに張り付いてるぞ！振り切るんだ！』  
「なっ！」

後ろを振り向くと同時に、MIG1の主翼から機関銃が放たれ、コックピットのガラスを粉碎して行った。

コックピットのそこに溜まった、散らばった強化ガラスを足で振りとけた。

ズダダダダダダ！

『シヨボン、空母に帰還せよ。直ちに帰還せよ。従わない場合射殺する』

「これだと、命が危ない・・・ブーン、後ろの敵をほどいてくれ！」

『おっおっ、20MMでぶっ飛ばしてやんよ。あれ？いないお』

「シヨボン・・・」

シヨボンは急降下し、釜山の軍港近くで待機していた空母に帰還した

## 海戦ブリーフィング（前書き）

感想お待ちしております。

## 海戦ブリーフィング

空母に帰還し、次の任務を艦長室で待つこととなった、シヨボンとブーンとほかの隊員

白いひげを生やした中年男が、

「まあそこに座りたまえ。西アフリカの豆を使ったコーヒーを味わいたまえ」

「では、お言葉に甘えて・・・シヨボン、座るお。コーヒー冷めるお」  
「うん。そうしよう」

西洋の木製の椅子に腰をかけ、西アフリカの豆を使ったコーヒーの独特の香りを楽しむ二人は、コーヒークップの取っ手に人差し指と親指で持ち上げ口に運び、味見をした。

「ぶはっ！苦いっ！」

「ん？俺の口には十分合うお」

「苦いか。シヨボン海軍航空隊長殿。君は戦闘機乗りだったな、今回はいくつ迎撃した？」

シヨボンは、

「今回は4～5だった気がします」

「ほう・・・1対5か？」

「そうです。相手は素人でした」

「ふむ・・・なるほどな」

艦長は机から離れ、シヨボンが座る前に立ち作戦内容を話した。

「では、作戦内容を言う。今我々がいるのは、対馬の北東に位置する」

艦長は壁に貼り付けられた日本地図に対馬の北東部分に青鉛筆で丸をつけた。

「偵察機が見つけた、敵艦隊を撃破してくれ」

今度は赤い画鋲を日本海にさした。

「この赤は敵でこの青いが描画日本軍。我々だ」



「戦闘機乗りのシヨボンは、妨害をする敵機を迎撃してくれ」

「爆撃はブーンの指示に従え。以上だ。質問はあるか？」

ブーンがすばやく先に手を上げ椅子から立ち上がる。

「このコーヒー豆はおやつに入りますか？」

「気に入ったのか。まあ、戦闘中は飲めないからポリポリ食ってる」

紙袋を投げ渡され、シヨボンはそれをキャッチ。早速座り、非常に苦いコーヒー豆をポリポリ食べた。

「NIGEEWWW」

「以上だ。総員、準備に入れ」

【了解であります！】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6067w/>

---

ショボンとブーンの日米空軍物語

2011年10月8日03時22分発行